



2002年2月10日
No.72号



JAWAN

日本湿地ネットワーク・JAWAN通信

日本湿地ネットワーク (Japan Wetland Action Network)
〒191-0052 東京都日野市東豊田3-18-1-105 柏木実方 TEL&FAX 042-583-6365
JAWAN URL: <http://homepage1.nifty.com/wetland/jawanj/info/index.html>
郵便振替/00170-8-190060 日本湿地ネットワーク
■団体会費/5000円 ■個人会費/3000円



三番瀬で翼を休めるミヤコドリ 撮影：田久保晴孝

【目次】『絶望』から始まった21世紀(辻 淳夫).....	2
諫早湾干拓を真摯に見直し、徹底した開門調査を実施せよ！(青木智弘)	3
三番瀬のこれから(牛野くみ子)	4
報告 国際湿地シンポジウム in 東京湾三番瀬	5
韓国でシギ・チドリ類のワークショップ(JAWAN主催 2月16日～)	6
吉野川からの報告(井口利枝子)	8
INFORMATION ストリーパー博士が来日します！	9
「もう海は埋めない」 名古屋市、藤前後のあらたな決断(辻 淳夫)	10
博多湾人工島/湿地再生の取り組み(松本 悟).....	11
干潟を守る日2002のご案内	12
会費納入のお願い/編集後記	12

『絶望』から始まった21世紀

文：辻 淳夫（日本湿地ネットワーク代表／藤前干潟を守る会）

新年早々、小雪舞う中で、理不尽な「工事再開」に身を賭して抵抗した、諫早・有明海漁民や市民の方々の、兵糧攻めにあい、退かざるを得なかった無念はいかばかりだったでしょう。

諫早のこの1年が何だったのか、干潟再生の道は見えたのでしょうか？

21世紀の幕開きに起きた有明海の大異変と、かつてない4県漁民の大決起直後の状況からは、絶望的な政治の欺瞞と後退ではないでしょうか？

9.11の惨劇とその報復が浮き彫りにした「力は正義」の現実世界が、諫早でも川辺川でも、あからさまに「道理」を蹴散らして居直っています。子どもたちに、安心で、心ゆたかなくらしを伝えるには、そうとう厳しい覚悟が必要なようです。

しかし、「絶望」の中にも大きな希望があります。

「諫早湾内で起きた悲劇を有明海に広げてはならない」と諫早干拓事業への同意と漁業権補償等の基本契約無効を裁判に訴えた森文義さん（元小長井漁協組合長）の深い覚悟と、「有明海漁民・市民ネットワーク」という、はじめて漁民と市民が手をつないだたたかひの広がりがあるからです。

JAWAN10周年の国際シンポ直後の三番瀬の埋立計画断念は、大浜さんら千葉の干潟を守る会を中心とする人々の30年を越す努力の結実です。勿論、「再生」の名によるあらたな圧力の中で、いかに真の「復元」を図るか、苦難が続くと思いますが、それは希望のある「たたかひ」ではないでしょうか？

泡瀬干潟でも、一昨年国際シンポから、大いに地元の世論が盛り上がり、干潟を守る希望をもちながら、ねばり強い活動がつけられています。

藤前では、埋立断念から劇的なゴミ減量を果たし、最大の懸念だった、代わりに別の浅海域

を埋める「広域処分場」構想が断念されました。藤前干潟は晴れて、この秋のラムサール登録をめぐっています。

また、30年の歴史を持つ環境庁が環境省になった機会に、NGOから21世紀の環境政策を提言することになり、JAWANとして、干潟・浅海域の保全と復元、公有水面埋立法の廃止と湿地保全法（仮称）の制定を提言しました。

また、JAWANの存在が認知され、発言を求められる機会も増えてきました。昨年11月には、大津での世界湖沼会議NGOフォーラム、神戸でのEMECS（世界閉鎖性海域会議）NGOフォーラム、新潟でのラムサールシンポジウムが相次ぎ、ラムサール条約に関わる多様な湿地NGOの存在と、それと手をつなぎ始めた行政が見えてきました。この動きは2003年京都の世界水会議に引き継がれるでしょう。

この秋にはパレンシアでのラムサール会議、コスタリカの宿題が検証されます。諫早や川辺川、泡瀬干潟や中池見などの緊急課題を解決し、潮間帯湿地の保全と復元、湿地保全法の制定など、21世紀の保全戦略を具体化する機会にしたいものです。

2月中旬には、ソウルでのJAWAN主催のハマシギ・ワークショップに参加します。私には初めての韓国、ここも厳しいセマングムを見て、山下さんの足跡を辿り、「喝」を入れ直して貰おうと思います。

「絶望」から希望を生み出すために。



諫早湾の干拓工事再開に反対する漁業者の抗議行動（2002年1月10日）

諫早湾干拓を真摯に見直し、徹底した開門調査を実施せよ！

文：青木智弘（諫早干潟緊急救済東京事務所）

農水省の強引な工事再開

島原の漁船漁民有志や、有明海漁民・市民ネットワーク有志らの、現地での座り込み抗議にもかかわらず、2002年1月9日より国営諫早湾干拓事業の工事が強引に再開された。

小江工区や中央干拓地の工事について農水省は「背後地防災のためであり、漁業への影響はない」などとしているが、この説明は明らかなゴマカシであり、ノリ漁家多忙期の工事再開はダマシうち以外の何ものでもない。

事業は真摯に見直さず開門調査には消極的

昨夏の九州農政局設置の事業再評価第三者委員会の「見直し」答申にもかかわらず、農水省は事業を真摯に見直していない。また、昨年末「有明海ノリ不作等対策関係調査検討委員会」が、短期／中期／長期の開門調査を提言したのに、徹底した開門調査について国や長崎県などは、消極的もしくは反対だ。

その理由は「事業は、干拓調整池の水位を-1m以下に保つことにより、背後地防災を実現している」などというものだ。だが、国や長崎県などが-1mの防災効果を、故意に誇大宣伝していることも明白である。

真剣に代替案を検討するべきだ

関連市町などは、さまざまな防災事業を、干拓事業とは別途に行っており、徹底した開門調査に備える対策に、国などが言うほど莫大な予算が必要とは思えない。

いわば「見直さない見直し」案は「平成18年度までに必要となる事業費は、約240億円」というものだ。それならばなぜ、この額で、他の手段で、既存低平地農地の湛水対策、塩害対策、用水確保、老朽化した樋門や堤防の改修を行ない、干拓事業を中止しないのか？

「240億では足りない」と反論するかもしれないが、既存堤防の改修を怠ったまま干拓予定地に新たに、これから内部堤防を造成しようとい

うのは、国民一般が見ればおかしい。

国や県、関係市町は、干拓事業の代替案検討を怠り、有明海漁民の抗議や国民の批判をよそに、いたずらに事業に固執しつづけている。硬直的だと批判されてしかるべきだ。

私見によれば、国営諫早湾干拓事業でしか実現できないことは、ごくわずかであり、このまま事業を完成させるデメリットの方が大きい。たとえば、縮小案によって造成される農地でつくられる予定のジャガイモと、有明海全域の漁獲減を比較するなら、もはや事業は食料増産策としても、完全に落第である。

防災効果と称されるものの殆どすべても、別の事業によって実現可能だろう。

私たちの課題

環境破壊の大規模干拓事業を中止し、環境と調和した防災対策などを実現し、諫早干潟を再生させ、有明海の潮流潮汐を復元することが、21世紀となった今、求められる。

事業の中止と、徹底した開門調査の実現、必要な防災対策の実行などを求めて、私たちは全国規模署名など、取り組みを強化する。ひきつづき全国のみなさまのご協力をお願いしたい。

（2002年1月20日）

「諫早湾干拓の工事中止と再見直しを求める署名」にご協力ください！

諫早干潟緊急救済本部と有明海漁民・市民ネットワークでは、「諫早湾干拓の工事中止と事業の凍結」「環境回復に配慮した事業の再見直し」「水門開放調査の速やかな実施」をを求める国会請願署名活動を実施中です。ご協力いただける方は下記まで署名用紙をご請求ください。用紙はホームページからもダウンロードできます。

諫早干潟緊急救済東京事務所

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷3-7-3
ベルビュー目白701 TEL/FAX 03-3986-6490
URL <http://www2s.biglobe.ne.jp/isahaya/>

三番瀬のこれから

文：牛野くみ子（千葉の干潟を守る会）

長年のみんなの力が実を結び、昨年、三番瀬は埋立中止となりました。多くの方から良かったですネー、おめでどうの声寄せられました。素直に私たちは喜び合いました。が、これで終わったわけではありません。堂本知事は「環境保護団体や漁業関係者から、三番瀬は東京湾に残された貴重な自然である。干潟を守り、自然を再生すべきと言う意見もいただいている。自然を再生するため、これからは第2段階として具体的な計画の策定に入る」と9月議会で言明したからです。

そのため、三番瀬の再生計画を策定する仮称「三番瀬再生計画検討会議」（円卓会議）が作られることになったのです。

組織を立ち上げるための設立準備会が今年の11月と12月に開催されました。設立準備会は7名の学識経験者（岡島会長（青森大学大学院）を除いては、これまで補足調査や計画策定懇談会の委員を務めた方）で構成され、いままでの2回で、三番瀬の課題の整理と今後の検討組織について、事務局体制等について議論がされました。

会議は全面公開と住民参加を旨としており、今まで三番瀬に関わってきた団体は、オブザーバーとして参加し、一般傍聴者も意見を言う場を与えられています。

1回目の準備会では、河川管理の専門家やアセスメントの専門家を学識経験者の中に加えて欲しいとか、委員に子どもを入れては、産業界からも入れては、漁業関係者の枠を増やして欲しいなど要求が出されました。その結果、2回目には専門家は9名に、漁業関係者は3名から4名となりました。そして、学識経験者、漁業関係者、地元住民代表、産業界代表の名前も岡島私案としてあがりしました。が漁業関係は県漁連会長とか漁協会長、地元代表は三市とも自治会連合会会長、経済界・産業界代表として市川商工会議所会頭など旧態依然とした選び方で、いささか不安と危惧の念を抱かざるを得ません。これで堂本知事の言う「千葉モデル」となるのでしょうか。

私たち環境保護団体は、4人の枠をめぐる結局3回話し合いを行いました。1回目は、当初、県が声をかけていた団体よりも数が増えたと言うことで、一部グループから反発が起こり、「会長自らが秩序を乱した」と言って決まりませんでした。2回目は岡島私案が最初に出されたので、「これは決め方としておかしい」、たとえ結果的に会長案になろうとも、私たちはみんなで話し合って決めようと言うことで、3回打ち合わせを持ったのです。そして1月16日、再再度、

三番瀬再生計画検討会議 委員構成

学識経験者 9人

磯部 雅彦（海洋工学）東京大学大学院教授
大西 隆（都市計画）東京大学教授
岡島 成行（住民参加）青森大学大学院教授
尾崎 清明（鳥類）（財）山階鳥類研究所 標識研究室長
倉坂 秀史（環境アセスメント）千葉大学助教授
風呂田利夫（底生生物）東邦大学教授
細川 恭史（海洋環境）国土交通省 国土技術政策総合研究所 部長
松川 康夫（水環境）独立行政法人水産総合研究センター 室長
望月 賢二（水生生物）千葉県立中央博物館 副館長

環境保護団体 4人

大野 一敏 ベイブランアソシエイターズ 代表
大浜 清 千葉の干潟を守る会 代表
小笠尾精一 三番瀬研究会
吉田 正人 日本自然保護協会 常務理事

漁業関係者 4人

安室 宏 千葉県漁業協同組合連合会 会長
落合 一郎 市川市行徳漁業協同組合 代表理事組長
石井 強 南行徳漁業協同組合 会計理事
滝口 嘉一 船橋市漁業協同組合 代表理事組長

地元住民 3人

歌代 素克 市川市南行徳地区自治会連合会 会長
鈴木 英司 船橋市自治会連合協議会 副会長、環境部長
岡本 孝夫 浦安市自治会連合会 会長

公募 3人

米谷徳子（主婦）千葉元（会社員）松岡好美（大学生）

地元経済界・産業界 1人

佐藤フジエ 市川商工会議所 会頭 以上24名

みんなで話し合いを持った結果、4人を選出いたしました。多数決に頼ることなく決まったのは、とても良かったです。私たちは、まだまだ話し合いで物事を決定することに慣れてないことを痛感しました。これからは私たちが選んだ委員に、積極的に協力をして、三番瀬を良い方向に持っていく責任が私たちにはあります。

このほか地元住民として公募により3名が選ばれ、1月28日円卓会議は発足しました。会議では名称、目的、権限、組織のあり方について議論がされました。

再生の定義について、大浜さんより「再生とは死んだところを生き返らせることだが、自然を再生するとはおこがましい。あくまで自然の働きを援助してやること」「尤もと思うが、字句の問題で時間をとるより中身に入りたい」「二枚貝は1/10に減っている」「死んでいる。いや生きているという話もある。現状を調べ直す必要がある」等と意見が交わされた。

円卓会議の前途は多難ですが、傍聴者も意見を言えます。これからは円卓会議を育てることが私たちのつとめでしょう。

報告 国際湿地シンポジウム in 東京湾三番瀬 2001年9月15・16日 JAWAN主催

全国の湿地を保全しようと、日本湿地ネットワーク (JAWAN) 主催の「2001 国際湿地シンポジウム in 東京湾三番瀬」が9月15、16日の両日、市川市で開催されました。県内外から延べ400人が参加し、「湿地・干潟の保全と復原」や「三番瀬をラムサール条約指定に」をテーマにし、活発に議論しました。

* * *

初日の15日は、三番瀬などを視察したあと、全国各地で湿地保全にとりくんでいる団体がそれぞれの活動を報告しました。諫早湾干拓によって有明海的环境に異変が生じていることから、諫早湾の潮受け堤防の開削または前面撤去などを求めて運動していること。泡瀬干潟は奇跡的に残った琉球列島最大規模の干潟であるが、パブルのときに立てられたリゾートホテル主体の埋め立て計画に免許が下ろされて危機に瀕していることから、同干潟を守るために埋め立て事業の中止を求める運動を進めていること。名古屋市の藤前干潟は、ゴミ処分場として埋め立てられる予定だったが、それを中止させ、今はゴミの排出量を減らす真の循環型社会の実現をめざして活動していること などを報告しました。

* * *

2日目の16日は、米国の同時多発テロ事件の影響で参加が遅れた釧路公立大学・元ラムサール事務局員の小林聡史氏に代わり、JAWAN国際担当の鈴木マギー氏がラムサール条約の内容などについて講演。鈴木氏は、「ラムサール条約は、それぞれの締約国が1カ所以上の登録をすることになっている。そして、登録地だけでなく、すべての湿地について、保護したり、ワイズユース（賢明な利用）を推進することを義務づけている」と強調しました。つづいて、同事件の影響で来日できなくなったラムサール条約科学技術検討委員会湿地復原部会代表のビル・ストリーバー氏に代わり、世界自然保護基金ジャパンの東梅貞義氏が、ラムサール条約が提案している湿地復原の原則と指針（ガイドライン）について講演しました。東梅氏は、「提案では、湿地を修復したり復原し

たりする際は、“復原するという約束を価値の高い自然の湿地を引き替えにすることは回避されなければならない”としている。つまり、“今ある湿地はつぶさない、減らさない”これが大原則である」と述べました。

「バレンシア会議に向けて」というテーマで講演した環境省自然環境局野生生物課の黒田大三郎課長は、2002年にスペインのバレンシアで開催されるラムサール条約締約国会議に向けた環境省のとりのみなどを話しました。黒田課長は三番瀬についてもふれ、「三番瀬はスズガモやシギ・チドリ的重要渡来地であり、国際的に保全すべき価値は十分にあり、ラムサール条約に登録する資質がある。したがって、登録の前提条件である国設鳥獣保護区の予定地に含めることを前向きに検討している」と表明しました。

パネルディスカッションでは、「三番瀬が守られるかどうかは日本の湿地が守られるかどうかの問題でもある」「三番瀬は市川側だけを埋め立てたとしても、その影響はほかの区域におよぶ。沿岸域を一体とした統合的な管理が必要」「今ある干潟や浅瀬をつぶして人工干潟をつくるのはナンセンスなことは、藤前干潟に関する環境庁見解でも明らかにされている」などの意見がだされました。また、いまある干潟や浅瀬をつぶさないで、遊休埋め立て地などを湿地にもどす提案が、「市川緑の市民フォーラム」と「行徳野鳥観察舎友の会」からそれぞれ発表され、反響をよびました。

最後に、「目的のいかに問わず、全国の湿地、干潟の開発を凍結、中止、廃止させよう」「三番瀬の当面の保全対策について、専門家、市民などの考えを尊重して、浅海・干潟の埋め立ては行わず、早急に青潮の発生源である浚渫跡など、傷だらけの海底を埋め戻し、海岸線後背地域の湿地化などの修復工事を着手させよう」などとする宣言文を採択し、閉会しました。

千葉の干潟を守る会のホームページ (<http://www2.justnet.ne.jp/sanbanze/>) に詳しい報告や、宣言文などが掲載されていますのでご覧ください。

JAWAN主催

シギ・チドリ類のワークショップ

各国のNGO、専門家が集まり2月16日から韓国で開催

東京湾東岸のシギ・チドリ類の個体数調査によれば、1973年からの30年弱の期間でハマシギの個体数はほぼ4分の1に減りました。この時期を通じて、シギ・チドリ類全個体数の中でハマシギの占める割合は、ほとんど変わりありません。一方この期間、東京湾の干潟はどんどん埋め立てられて、湾奥部には三番瀬が残るだけとなってしまいました。

諫早湾の締め切りの悲惨さから、鳥たちの生息地の人間に対する意味を理解する人たちが増えてきているにもかかわらず、泡瀬干潟を始めとして多くの干潟の破壊計画が、引き続き実行されようとしている今、残る生息地の重要性を把握することは緊急の課題です。

JAWANとWWFの働きかけが基になった、1999年から始まった日米渡り鳥条約に基づくハマシギ調査、それと連動してロシアでも始まっているハマシギ・ヘラシギ調査は、干潟の指標生物である両種のカラーフラッグを使った標識調査です。米国、ロシアの生息地で、鳥たちの足につけたフラッグを日本、韓国、中国、台湾などで見つけ、彼らの渡りを調べて生息湿地保全と、種の保護戦略の確立を目指しています。

JAWANは、日本各地の湿地についてデータを集積して客観的な保全の根拠とするため、また、フライウェイ各国の保全団体との協力関係を推し進めるために、この調査を積極的に推進してきました。

この調査が保全と保護のためにより有効な手段となるために、また特に東アジアの各国の協力を深めようと、以下のワークショップを計画しました。また、有明海の漁民たちとのつながりができた結果、有明海漁民・市民ネットワークから、森文義代表にも参加していただき、漁民同士の交流や、今年のラムサール会議のテーマ、湿地と人と文化についても考えます。

ワークショップ 2002

シギ・チドリ類保全活動が地域住民に与えるもの

北東アジアの干潟の指標生物・ハマシギとヘラシギの調査から考える

特に河口域に広がる潮間帯湿地は地球上で最も生産性が高く、高い価値を有する場所の一つである。東アジアの中緯度地域では、河口域や沿岸湿地は、顕微鏡でしか見ることのできないプランクトンから肉眼でも容易にみることのできる鳥までのさまざまな生き物をはぐくむだけでなく、漁業活動や人間社会をさまざまな分野でささえてきた。

ハマシギとヘラシギの2種の鳥もそんな生き物である。遠くアラスカやシベリアで繁殖の巣づくりをし、渡りの途中や越冬期（非繁殖期）には広く東アジア地域の潮間帯湿地を使って生息する。これら2種はともに、沿岸湿地が干拓によって喪失し、公害や愚かな土地利用のためにその他の地域が悪化してきた結果近年著しく減少した。韓国のみならず、隣国である日本や中国においても同様である。

これらのシギ・チドリ類の減少は、単にバードウォッチャーや研究者だけに任せていて良い問題ではない。ハマシギも、ヘラシギも、ともに環境の変化

を敏感に受ける生物指標である。これらの種が減少し、また絶滅してしまうことは、種が生存に依存している生息地が失われているという警鐘である。そこには湿地生態系を通し、細菌類を一端として、他端に人間社会にまで至る生命のつながりがあるからである。

今年は「湿地：水、文化、生命」というテーマでラムサール条約の締約国会議が開かれ、湿地の文化とその人々や生命にとっての重要性の議論が行われる。ハマシギとヘラシギの保全と、地域社会とのつながりを考えるワークショップへの参加を呼びかける。

* * *

【日時】2002年2月16～17日 会議（2日間）

2月18～19日 エクスカーション

韓国の干潟の見学（オプション）

【場所】ソンゴンフェ大学

韓国ソウル市九老区ハン洞1-1

【主催】日本湿地ネットワーク

【共催】韓国・湿地と鳥の友達、韓国湿地保全連帯会議

【助成】環境事業団地球環境基金、トヨタ財団、世界自然保護基金ジャパン

【目標】

1. ハマシギとヘラシギの保全に向け、より知見を深める。
2. 種と生息地に対する人々の関心を高める。

【目的】

1. 生息域を通じたネットワークを密にし、種に関する問題について理解を深める。
2. 2種の保全活動を介した利益を地域住民に伝え、協力して保全を進めるための戦略を立てる。
3. 重点国でより意味のある戦略を立てるための情報を交換する。
4. ラムサール条約の目的を推し進め、また他の湿地保全活動との連携を追求する。

【言語】英語・韓国語（日本語）

【参加者】このワークショップは、2種のシギ・チドリ類と潮間帯湿地の保全に携わる専門家と地域社会の代表をつなぐ。

専門家

米国 Brad Andres（米国魚類野生生物局）

ロシア Eugeny E. Syroechkovsky
（ロシア科学アカデミー）

韓国 パク・チニョン（韓国環境研究院）
ニール・モアーズ（湿地と鳥の友達）
キム・キョンウォン
（韓国湿地保全連帯会議）

台湾 リウ・ウェイティン（東海大学）

中国 リ・ユシャン（双台子自然保護区）

国際湿地保全連合 - オセアニア

Warren Lee Long

日本 茂田良光（山階鳥類研究所）

辻 淳夫（日本湿地ネットワーク）

森 文義（有明海漁民・市民ネットワーク）

【プログラム】

2月16日(土)

9:00 登録

10:00 開会・挨拶

10:10 始めに 背景と意味（ハマシギ・干潟・人々のつながり）

第1部 - a：漁業文化と保全活動（座長：キム・キョンウォン）

10:40 韓国干潟の漁業共同体 韓国漁民

11:10 有明海の漁業に起こっていること
有明海漁民・市民ネットワーク

11:50 韓国の干潟の経済的価値
ジェ・ジョンギル（韓国海洋研究所）

12:20 昼食

第1部 - b：住民にとって保全活動はどんな利益があるか（座長：イ・インシク）

13:30 保全活動と住民への便益 イ・インシク

13:40 日本の干潟保全活動 辻 淳夫

14:10 環境教育とエコツーリズム 韓国の経験
パク・チュンロク、キム・インチョル

14:45 東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ類生息地ネットワーク Warren Lee Long

15:15 コーヒータイム

第1部 - c：干潟と鳥たち（座長：ニール・モアーズ）

15:30 干潟と鳥たち ニール・モアーズ

15:40 ハマシギ・ヘラシギとその生息地
（スライド・ビデオ発表）

16:00 各国のハマシギ・ヘラシギ個体数調査
韓国 パク・チニョン
中国 リ・ユシャン
台湾 リウ・ウェイティン
日本 柏木 実

17:20 ディスカッション

2月17日(日)

7:30 ソンド（松島）干潟早朝観察会
シギ・チドリ類の個体識別と観察
干潟はどう保全すべきか？

11:10 昼食（干潟からの帰途に）

第2部：シギ・チドリ類と湿地保全

12:10 絶滅危惧種ヘラシギ：現状と保全の必要
エフゲニー・シロエチコフスキー

12:50 アラスカのハマシギ調査と繁殖地の現状
ブラッド・アンドレス

13:40 ハマシギの亜種の渡りとフラッグ調査
茂田良光

14:30 コーヒータイム

14:50 種の保全活動の優先事項と可能性
発表者たちからの提案

15:30 討議

16:00 閉会

16:30 問題点に関する専門家の会議（～19:30）

20:00 夕食

第3部：韓国西部のシギ・チドリ類生息地の見学

2月18日(月)

クンサン（群山）セマングム訪問

干潟と漁村。自治体、保全団体との会合

夜：シンポジウム

2月19日(火)

インチョン、カンファ島、ヨンジョン島に戻る

非繁殖期のシギ・チドリ類の個体数カウント
国際空港から帰国

希望により：2002年2月20～21日

プサン、慶尚南道地方へのエクスカージョン
（ウボ湿地・ナクトン江河口）

吉野川からの報告

文：井口利枝子

(とくしま自然観察の会 <http://www.shiomaneki.net/>)

徳島の母なる川といえる吉野川の河口の風景は、阿波弁では「わたしらの自慢なんじょ。」と言います。河口から3.3キロのところに架かる吉野川大橋からの眺めは、もうすでにそこが海かと錯覚するほどの雄大さで、初めて見た人はみな驚きの声をあげます。ご存知のとおり河口の約500ヘクタールが「東アジア～オーストラリア地域シギ・チドリ類重要生息地ネットワーク」に登録されており、広大な中洲や干潟は生きものたちの宝庫です。また、河口から14.5キロ離れたところにある第十堰まで広がる汽水域にはたくさんの干潟が点在します。2年前に徳島市で行われた第十堰の可動堰化に対する住民投票は、全国的に注目され、投票から約7ヶ月後白紙勧告が出されました。つい最近、国土交通省は、新河川法に基づく河川整備計画策定に向け、流域全体の整備の在り方を住民参加で議論する「検討の場」を発足させる方針を明らかにしました。県民世論を大きく分けた第十堰問題も河川整備計画づくりの中で再び論議されることになりそうです。しかし、全国区で名前が知られた第十堰の影で、河口干潟周辺では、干潟の真上を通過する東環状線と高速道路の2本の道路橋建設や河口吐き出し口の人工島埋立て計画（マリンピア沖州）など複数の大規模公共事業がなんと粛々と進んでいるのです。こんな具合に……。

マリンピア沖州埋立てと高速道路（四国横断自動車道路） 国のアセス法に則った県の要綱で環境アセスが実施され期待しましたが、審査会は非公開のまま、形式的なものになってしまいました。先日、評価書の縦覧が終了しました。埋立て地は、最河口に架かる高速道路のインターチェンジ用地に使われる予定。

東環状線 徳島市を巡る環状線の一部として吉野川渡河橋（1.3キロ）を含む東環状線計画は、6.4キロ区間が1000億円の事業。県内で事



業白紙になった第十堰と細川内ダムと同額です。

待ち人來たらずになるかもしれない高速道路用地として埋立てされそうな沖州海浜、20年後に全環状線（4000億円）が開通した暁には、市内渋滞緩和が少し見込まれるかもしれないという説得力のない理由で架けられる橋は、河口干潟を分断してしまいます。いったい、誰のための何のための計画なのでしょう？ 計画を知れば知るほどいろいろな矛盾につきあたり、迷路に迷い込んでしまいます。道路や橋の建設は、それがどうかを議論するよりもまえに経済効果に置き換えられてしまいますが、私たちは干潟から豊かさとは何なのかを問いかけてみたいと思っています（何かよいお知恵があれば授けてください）。

そこで、昨年10月の3日間、河口干潟で8年間自然観察会を開いてきた、自称・干潟ファンクラブの私たちが、干潟で感じた思いを盛り込んで、初めて「わくわくドキドキ干潟百科展」を開きました（写真）。全国的には干潟を守る活動が活発になっているなかで、ほんとおくればせの活動ですが、原点に戻って、吉野川干潟からの私たちの等身大の情報発信でした。

エプロンのポケットから干潟の生きものが飛び出す干潟の即興劇エプロンシアターは、観客の子どもたちにずいぶんと助けられました。夕

イムスリップ、のぞき箱、クイズラリー、名場面、珍場面の写真展そして、吉野川干潟からの1000人のメッセージ（どこかで聞いたことがあるようなネーミングですが）、全国の干潟コーナーでは、こんなに干潟に熱き思いを抱く人たちがたくさんいるよということを多くの人に知らせたかったのです。

最後になりましたが、干潟展開催にあたり、山下弘文さんを写した貴重なパネルをお貸しくださった諫早干潟緊急救済東京事務所の森永幸子さん、諫早湾の昔の姿を撮った富永健司さんのパネルを急遽送ってくださったWWFジャパン、チョエさんの韓国語の長いメッセージを訳してくださった柏木実さん、私たちの干潟展の

主旨に賛同して名前を連ねてくださった皆さん、各地の干潟の情報やあたたかいメッセージを送ってくださった皆さん、ほんとうにありがとうございました。



INFORMATION

ストリーパー博士が来日します！ 各地での観察会、勉強会にご参加ください

日本湿地ネットワークでは、ラムサール条約科学技術検討委員会のビル・ストリーパー博士を、2001年9月の国際湿地シンポジウム（千葉）にゲスト・スピーカーとしてご招待しましたが、アメリカの同時多発テロ事件の影響で、残念ながら来日できませんでした。そこで、今年2月下旬に改めて日本にお越しいただき、各地で

「ラムサール条約の提案する湿地再生の原則と指針」についてお話をさせていただくことになりましたのでご案内いたします。各地で行われる観察会や勉強会にぜひご参加ください。

なお、スケジュールは変更になる可能性があります。詳しくは各地の担当者にお問い合わせください。

ビル・ストリーパー博士のスケジュール

- 2月18日（月） ソウル到着
16～17日のハマシギ・ワークショップの参加者と一緒に現地の湿地観察
- 19日（火） 同上
- 20日（水） プサン地域の湿地観察と勉強会
- 21日（木） 諫早へ移動 19:00～21:00 勉強会（諫早市高城会館1F）
- 22日（金） 諫早湾の視察、福岡へ移動
- 23日（土） 10:00～12:00 和白視察
14:00～17:30 勉強会（ふくふくプラザ）
東京へ移動
- 24日（日） 午前中～14:00頃まで三番瀬と行徳野鳥観察舎
15:00～17:00 国際シンポジウム パート2（和洋女子大学）
- 25日（月） 宮城へ移動、蕪栗沼観察と現地団体との勉強会
- 26日（火） 環境省など関係省庁へのレクチャー（JAWANも代表参加）
- 27日（水） 敦賀市へ移動、現地の団体との勉強会
- 28日（木） 中池見の観察、名古屋へ移動
- 3月1日（金） 藤前干潟観察と地元団体との勉強会
- 2日（土） 成田出発

問い合わせ先

- 韓国のスケジュール
柏木 実
TEL 042-583-6365
- 日本国内のスケジュール
鈴木マギー
TEL 0879-33-6763
- 諫早：山下八千代
TEL 0957-23-3740
- 福岡：松本 悟
TEL 092-542-5515
- 千葉：牛野くみ子
TEL 0474-53-4987
- 宮城：宮林泰彦
TEL 0228-32-2592
- 敦賀：笹木千恵子
TEL 0770-23-5003
- 名古屋：辻 淳夫
TEL 052-735-0106

「もう海は埋めない」

名古屋市、藤前後のあらたな決断

文：辻 淳夫（日本湿地ネットワーク代表／藤前干潟を守る会）

藤前干潟の保全と同時に、藤前から気づかされた都市のゴミ問題を解決し、持続的に生存できる社会のしくみをつくりだしたいと考えてきましたが、その意味でとてもうれしい成果があったことをお知らせします。

昨年11月、名古屋市は、市の南西部、名古屋港西5区南の浅海域に構想されていたゴミ埋立計画：広域処分場構想を断念すると発表しました。その際、松原武久名古屋市長は、「もう海は埋めない」と明言し、埋立ごみのゼロ化をめざす決意を表明されました。

私たちはこの決断を歓迎し、1947年以来の臨海工業開発のための干潟や浅海域の埋立によって失われてきた自然海岸や生態系の破壊によっていま瀕死の状態にある伊勢湾の環境復元にとって、画期的な意味を持つものと評価しています。

この決断は、1999年1月の、日本最大の渡り鳥の中継地である藤前干潟のゴミ埋立計画が断念されたことにつづく英断です。藤前干潟のゴミ埋立計画は、地元の市民、内外のNGO、研究者、弁護士などの長い間の努力と、諫早湾の「ギロチン」締め切りから湧き起こった世論から最後になんばった環境庁などの努力が、17年をかけてきた名古屋市の公共事業を最終段階で撤回させたのでした。

このとき、最終処分場の容量があと2年分に迫っていた名古屋市は、藤前の代替地として、名古屋港内の候補地のひとつとして、西5区南の沖合い浅海域に、周辺自治体と共に利用する広域処分場の構想を進めていました。しかし私たちは、この干潟浅海域も伊勢湾の生態系に重要であり、構想は藤前保全の英断を無にするものと強く反対してきました。

そして幸いにも、私たちが真の代替案として主張してきたことが実現しました。

周辺自治体の難色などによって、代替処分場の目途が立たなかった名古屋市は、1999年2月

「非常事態宣言」を出し、2年間で2割減の緊急ゴミ減量目標を立て、それまでは焼却と埋立を中心にしてきたゴミ行政を見直し、減量と資源化の努力を本気になって始めました。

政令都市で初めて踏み切った容器包装の資源化収集では、当初大変な混乱を招きながら、「藤前を守った以上、ごみを減らさなきゃ」という市民の責任感と、「分別が分らんかったら、わしらのところに持ってりゃあ」とシニアサポーターが現れるなどの自発的努力によって、「ここまで市民の協力が得られるとは信じられなかった」と、市長も述懐したように、2年間で総量で23%、埋立ゴミは46%と、目標を大きく超える減量を達成したのです。

そして、この努力が好感され、岐阜県多治見市にある現有の最終処分場の拡張が、名古屋市のさらなる減量努力の条件つきで許されることになり、現時点での見通しが10年以上は使えることになり、広域処分場構想を撤回する決断につながりました。

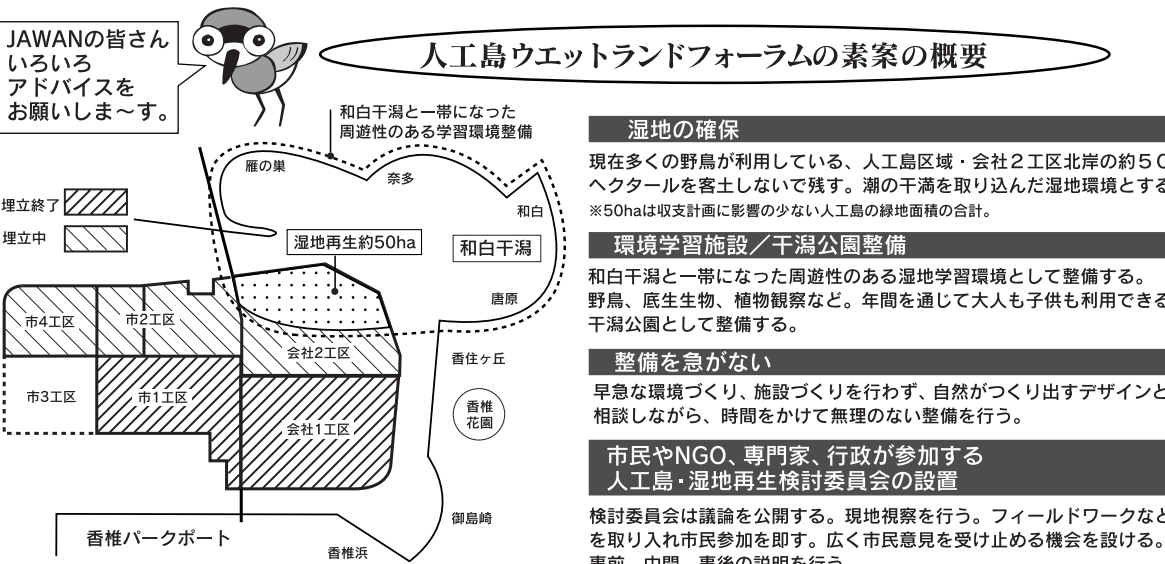
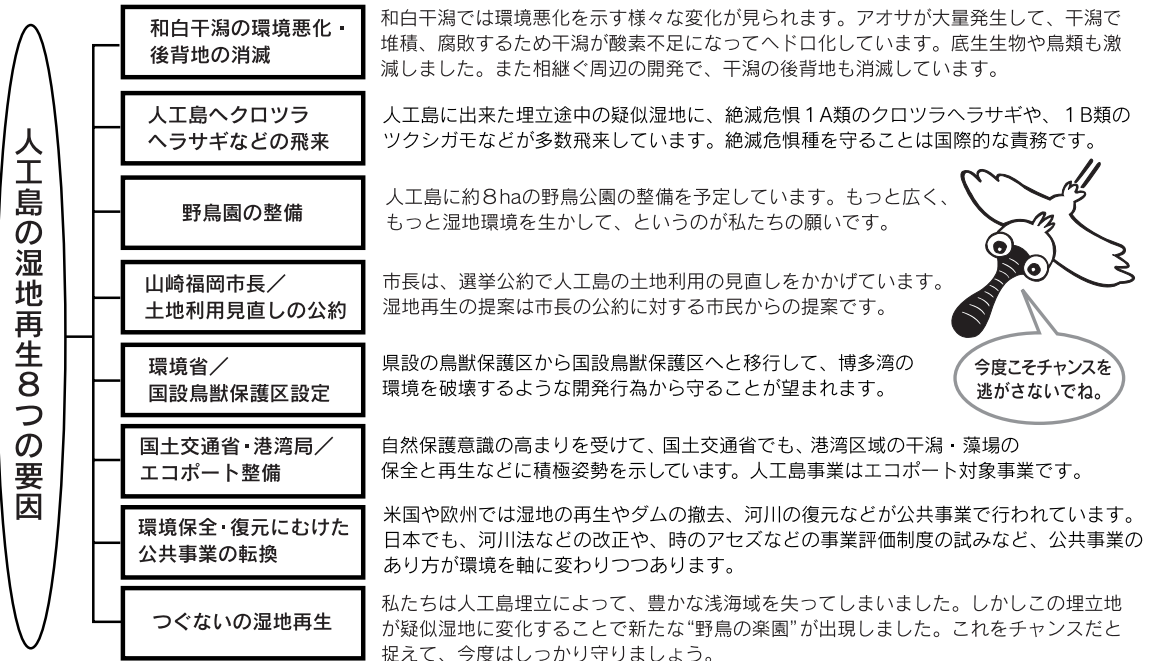
名古屋市は、内陸で小規模の処分場を引き続き、確保していく意向も示していますが、私たちは、現有処分場が使えるうちに、埋立ゴミをゼロにして、あらたな埋立処分場を不要することをめざしています。そのためには、「ゴミゼロ」を社会の設計理念として、生産の段階から発生を抑制し、廃棄や再資源化のコストが商品価格に正当に反映する、循環型の商品が有利になるような経済のしくみ（いわゆる「拡大生産者＝購入者責任」の確立）など、真の循環型社会をめざす政策や、価値観の転換が必要ですが、名古屋市と名古屋市民は、そのための大きな跳躍台に立ったといつてよいでしょう。

今、藤前干潟は晴れてラムサール登録地の指定をめざしています。順調に行けば、この11月、パレンシアで開かれる条約国会議で発表されることでしょう。

401haもの浅海域を埋め立て、和白白干潟の前面を閉ざしてしまう人工島埋立事業は、工期10年のうち7年半が経過しました。私たちが着工前に指摘したように、和白白干潟の潮流が滞り、干潟の環境は悪化しています。市のモニタリングでも昨夏期には底生生物がほとんど見られなかったとあります。鳥類も著しく減少しています。和白白干潟は大変厳しいエコシステムの中にあります。残念ながら、もう手付かずでは守りきれないのではないかと心配しています。

しかし、人工島埋立地の一部が浚渫土砂搬入で疑似湿地化しており、多くの渡り鳥が飛来しています。春・秋の渡りも人工島へ集中する傾向にあります。このような状況を逆に「チャンス」と捉え、人工島の疑似湿地を残しながら、和白白干潟の改善に取り組み、一体化した整備を行った上で、将来にわたって監視と保全の取り組みが必要だと考えています。現在、人工島ウエットランドフォーラムというグループで学習会を続け、福岡市への提案づくりを行っています。

世界の先進例に学び、湿地再生・復元の取り組みをすることによって、人工島埋立事業の悪影響を緩和し、この湿地の恵みを少しでも良好な状態で後世に伝えていくことがわたしたち市民の責任ではないかと思っています。



- 湿地の確保**
現在多くの野鳥が利用している、人工島区域・会社2工区北岸の約50ヘクタールを客土しないで残す。潮の干満を取り込んだ湿地環境とする。
※50haは収支計画に影響の少ない人工島の緑地面積の合計。
- 環境学習施設／干潟公園整備**
和白白干潟と一帯になった周遊性のある湿地学習環境として整備する。野鳥、底生生物、植物観察など。年間を通じて大人も子供も利用できる干潟公園として整備する。
- 整備を急がない**
早急な環境づくり、施設づくりを行わず、自然がつくり出すデザインと相談しながら、時間をかけて無理のない整備を行う。
- 市民やNGO、専門家、行政が参加する人工島・湿地再生検討委員会の設置**

検討委員会は議論を公開する。現地視察を行う。フィールドワークなどを取り入れ市民参加を即す。広く市民意見を受け止める機会を設ける。事前、中間、事後の説明を行う。

干潟を守る日2002のご案内

今年も湿地保護の全国キャンペーン「干潟を守る日2002」が4月から5月にかけて開催されます。JAWANでもこのキャンペーンを後援し、多くの加盟団体が参加しています。キャンペーンの詳細については実行委員会（TEL/FAX 03-3986-6490）までお問い合わせいただくか、ホームページ（<http://www5d.biglobe.ne.jp/higata/>）をご覧ください。

干潟を守る日参加団体・イベント日程（予定）

蒲生を守る会 5月6日
日本野鳥の会茨城支部 4月14日
盤洲干潟を守る会 5月12日
三番瀬を守る署名ネットワーク 3月31日
千葉県野鳥の会 4月7日、21日・5月3日、5日、6日
日本野鳥の会千葉県支部 4月21日
諫早干潟緊急救済東京事務所 4月16日
野生生物資料情報室 日程未定
東三河野鳥同好会 5月12日
六条潟と三河湾を守る会 4月27日
藤前干潟を守る会 4月28日
中池見湿地トラスト ゲンゴロウの里基金委員会
4月28日
日本野鳥の会大阪支部 日程未定
大阪自然環境保全協会「淀川自然観察会」
4月14日・5月4日
南港グループ96 4月28日
高松干潟を守ろう会 4月14日
日本野鳥の会三重県支部 4月14日
日本野鳥の会兵庫県支部 4月29日
日本野鳥の会広島県支部 4月21、29日

カヌーショップハルリバ 5月25日
日本野鳥の会愛媛県支部 4月29日
日本野鳥の会徳島県支部 4月21日
臼杵デザイン会議 日程未定
日本野鳥の会福岡支部 4月7日、14日
日本野鳥の会筑後支部 4月21日
和白干潟を守る会 4月27日
博多湾会議 4月14日
水辺に遊ぶ会 4月14日、27日
中津干潟を守る会 日程未定
諫早干潟緊急救済本部 4月14日
日本野鳥の会長崎県支部 4月14日
天草の自然を護る会 3月31日

新年度になりました。 会費の納入をお願いします。

いつも「日本湿地ネットワーク」をサポートしていただきありがとうございます。JAWANの会計は毎年1月から新年度となります。各団体、個人の皆様におかれましては、2002年度（1月～12月）の会費を、3月31日までに納入してくださいませよう、よろしくお願い致します。また、新会員の勧誘活動にもご協力ください。

未加入の団体、個人の皆様には、この機会にご入会いただきますよう、お願い申し上げます。

個人会費 3000円 団体会費 5000円
郵便振替口座 00170-8-190060
日本湿地ネットワーク



編 集 後 記

去年のテロでJAWANの国際湿地シンポへ来られなかったビル・ストリーパー博士は、2月に韓日ツアーをします。国内のスケジュールをご覧になって、できれば現場の観察会と集会に参加してください。

環境省は今年のラムサール条約締約国会議（パレンシア）のために、国別レポートをまとめています。近いうちに、パブリック・コメント（一般市民の意見）を募集するでしょう。今回の国別レポートの質問書は長くて細かいです。意見募集が始まる前にそれを勉強しておくために、JAWANではメーリングリストで仮訳を公開しています。メーリングリストに入っていない方はJAWAN国際担当（鈴木マギー TEL 0879-33-6763 FAX 0879-33-6762）、またはJAWAN事務所へ連絡してください。皆さんは地元の運動で十分過ぎるくらい忙しいと思いま

すが、国別のレポートのために意見をまとめることが、自分の湿地保護運動と全国の法律や政策の関係を明確にするきっかけになると思います。

ところで、JAWANは皆さんの運動を全国的・国際的なレベルで支援するために作られました。その趣旨をぜひご理解いただき、会費納入やカンパなど、JAWANの活動のために積極的にご協力いただきますよう、よろしくお願い致します。（マ）

市民団体や自然保護団体は何をしているのか!? 有明海漁民の阻止行動断念によって諫早湾干拓工事が再開してしまった後、何人かの一般の方から耳の痛いご意見をいただきました。暴走する自然破壊の事業に対し、残念ながら私たちはまだまだ非力です。今こそ、さらに強く幅広い「ネットワーク」の力が求められているでしょう。この2月から始まった干拓工事の中止を求める国会請願署名の活動には、JAWANも賛同し協力しています。皆様からのご協力をよろしくお願い致します。（矢）